

長子は両性格ともに弱かったが、これは弟妹の保護者の立場にあり、はっきりした性格を示さないためである。

次子は、最も望ましい性格を持つように成長するのであるが、われわれの実験群では、その構成上の理由から、特異な傾向が見られた。

E-10 出生順位と性格特性に関する一実験的研究 —特に依存性と攻撃性について—

広島大教育 伊藤 富美
○野村 泰代
平野 文子

1. 幼児期の性格形成には、家族内の人間関係が強く影響するが、この中で、出生順位も大きな要因であることが、従来の研究によって認められている。そこで、本研究では、人格の特性として、依存性と攻撃性を取り上げ、出生順位による差を、実験的に研究することにした。

2. 実験場面で、依存的・攻撃的行動を発現させ、その反応を求めた。被験者は市立幼稚園の園児50名で、その中、3人きょうだいのいずれかの位置にある者およびひとりっ子の41名が、実験群であった。これらについて、比較群と比較した。

3. 男女とも、ひとりっ子・末子が両性格ともに強かった。ひとりっ子は、保護過剰・社会的接触不足の状態にあるため、他人との協調・自己抑制・適当な譲歩などにおいて、不十分な態度・行動を取りやすく、末子は親から溺愛されるわがままに育てられる等の理由が考えられる。